滋賀・国領（こくりょう）遺跡

1　所在地　滋賀県彦根市田附町
2　調査期間　二〇〇三年（平15）四月～二〇〇四年三月
3　発掘機関　滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会
4　調査担当者　神保忠宏
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　平安時代後半・室町時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

国領遺跡は琵琶湖東岸にあり、湖岸までは約二kmに位置する。愛知川右岸の自然堤防がやや落ち込む地点にあたり、現在の集落に隣接する水田地帯にある。近くの八幡神社には永仁六年（一二九八）の銘をもつ七重石塔がある。

今回の調査は県道建設に伴うもので、約三〇〇〇㎡を調査した。調査の結果、平安時代の掘立柱建物三棟・溝・土坑・井戸など、室町時代の溝などを検出した。

（彦根西部）

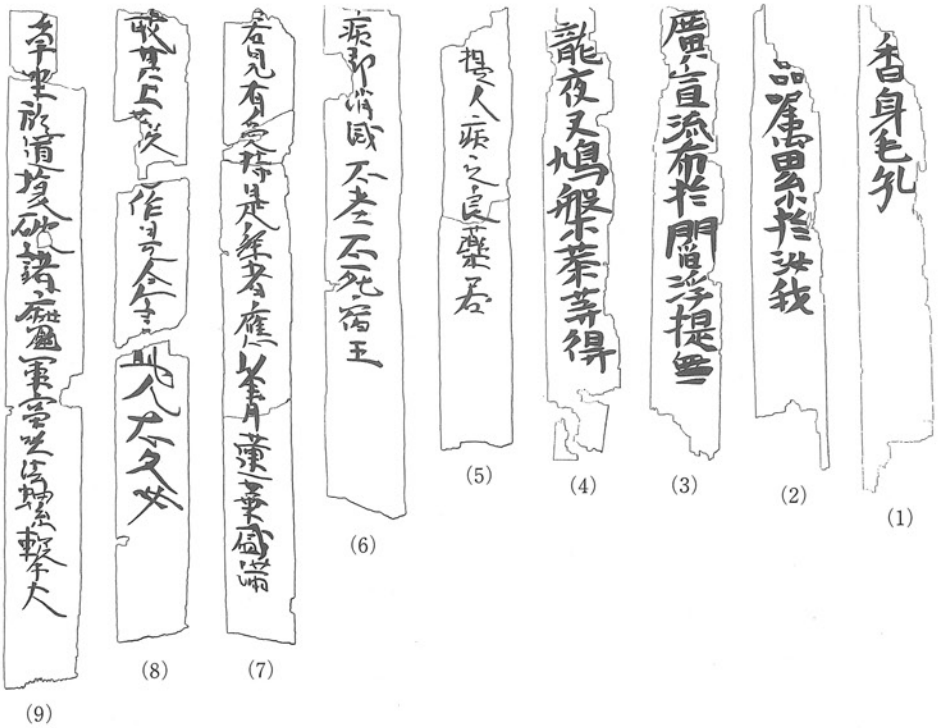
今回報告する柿経は、神崎郡条里方向とほぼ同じ方位の溝から出土したもので、この溝は幅約三m深さ約三五cmを測り、下層からは平安時代の遺物が出土した。柿経はこの溝の上層で、溝の中心より南側、直径約一mの範囲で出土し、比較的原形をとどめた一〇枚は土圧で押され二つ折になった状態でまとまってみつかった。そのほかは周辺に散乱する状態で出土した。総数は三一六点あり、うち文字の記載されたものは二〇六点、接合して出典が判明したものは三六点である。共伴遺物がないため時期は明確ではないが、薄く平滑に仕上げ、経文を片面のみに書写する形態から、一五世紀中期以降の可能性が高い。

8　木簡の釈文・内容

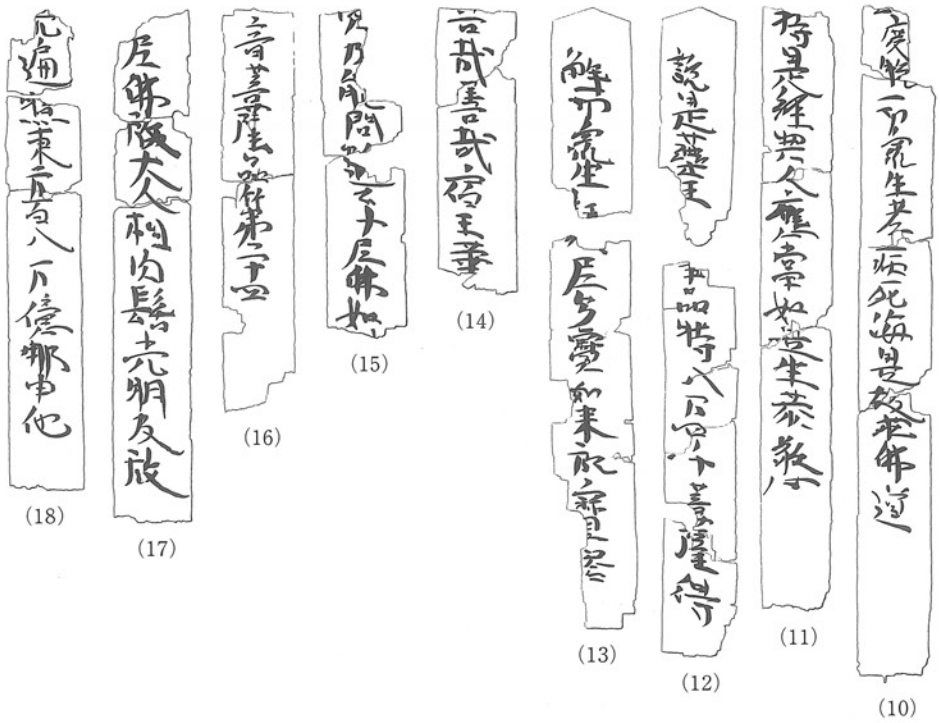
(1)　×香身毛孔□□　(128)×18×0.2　081
(2)　×品嘱累於汝我　(123)×19×0.2　081
(3)　×広宣流布於閻浮提無　(120)×18×0.2　081
(4)　×龍夜叉鳩槃茶等得　(118)×18×0.2　081
(5)　×提人病之良薬若　(115)×19×0.2　081
(6)　×病即消滅不老不死宿王　(133)×19×0.2　081

(7) ×若見有受持是経者応以青蓮華盛満 (168)×19×0.2 081
(8) ×散其上散已作是念言此人不久必 (170)×19×0.2 081
(9) ×草坐於道場破諸魔軍当吹法螺撃大 (179)×19×0.2 081
(10) ×度脱一切衆生老病死海是故求仏道 (176)×19×0.2 081
(11) ×持是経典人應当如是生恭敬心 (158)×19×0.2 081
(12) 「説是薬王…品時八万四千菩薩得 (63+105)×19×0.2 019
(13) 「解一切衆生語…尼多寶如来於寶塔 (55+104)×19×0.2 019
(14) ×善哉善哉宿王華× (75)×19×0.2 081
(15) ×徳乃能問釈迦牟尼佛如× (87)×19×0.2 081
(16) ×音菩薩品第二十四 (107)×19×0.2 081
(17) ×尼佛放大人相肉髻光明及放 (135)×19×0.2 081
(18) ×光遍照東方百八万億那由他 (127)×19×0.2 081
(19) ×有世界名浄 (63)×19×0.2 081
(20) ×智如来應供 (65)×19×0.2 081

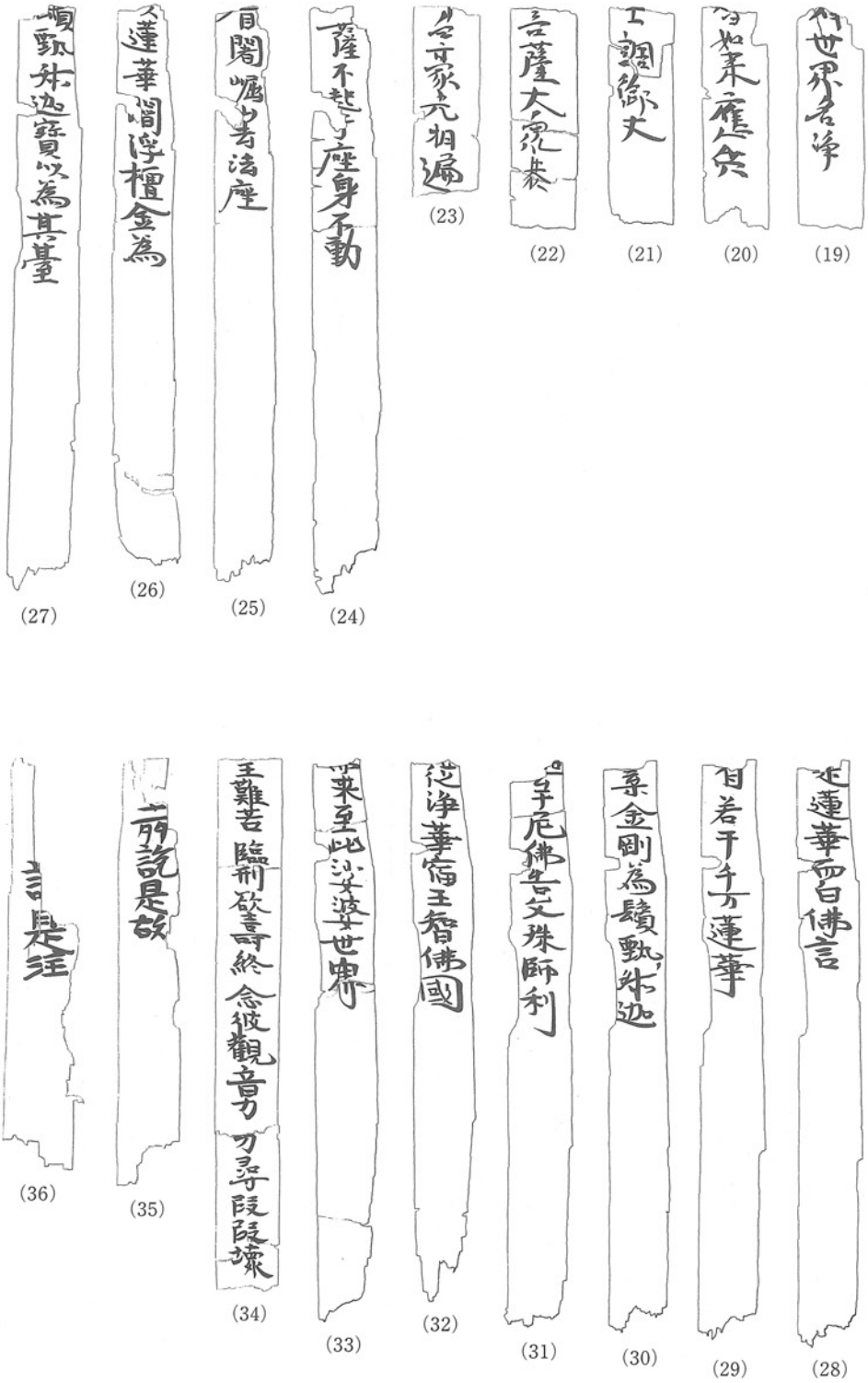
(21) ×士調御丈 (62)×18×0.2 081
(22) ×菩薩大衆恭 (64)×19×0.2 081
(23) ×百〔毫〕豪光明遍 (54)×19×0.2 081
(24) ×薩不起于座身不動 (164)×18×0.2 081
(25) ×耆闍崛山去法座 (165)×18×0.2 081
(26) ×蓮華閻浮檀金為 (160)×17×0.2 081
(27) ×鬚甄叔迦寶以為其臺 (167)×18×0.2 081
(28) ×是蓮華而白佛言 (168)×18×0.2 081
(29) ×有若干千万蓮華 (166)×18×0.2 081
(30) ×葉金剛為鬚甄叔迦 (164)×17×0.2 081
(31) ×迦牟尼佛告文殊師利 (163)×18×0.2 081
(32) ×従浄華宿王智佛國 (155)×17×0.2 081
(33) ×而来至此娑婆世界 (161)×17×0.2 081
(34) ×王難苦　臨刑欲壽終　念彼観音力　刀尋段段壊 (152)×18×0.2 081



(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)



(10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18)



(19) 世界名淨
(20) 如來應供
(21) 調御丈
(22) 菩薩大衆恭
(23) 圍繞說法相遍
(24) 座身不動
(25) 閻浮檀金為
(26) 蓮華
(27) 須彌外迦寶以為其臺
(28) 迦蓮華而白佛言
(29) 自若干千方蓮華
(30) 系金剛為鬚數外迦
(31) 尼佛告文殊師利
(32) 從淨華宿王智佛國
(33) 來至此娑婆世界
(34) 王難苦臨刑欲壽終念彼觀音力尋段段壞
(35) 前說是故
(36) 是注

(35) 〔訖カ〕□□是故　(120)×17×0.2　081

(36) □是注　(118)×19×0.2　081

経文は一枚に一七文字を記す。(1)～(15)は『妙法蓮華経』薬王菩薩本事品第二三で、(1)は一四八行目、(2)～(4)は一五〇～一五二行目、(5)～(15)は一五四行～一六四行部分である。(12)(13)は圭頭状の頭部が残る。(12)は一六一行目であるが中間で四文字「菩薩本事」が欠ける。(13)は一六二行目であるが、中間で三文字「言陀羅」が欠けている。(16)～(33)は『妙法蓮華経』菩薩品第二四で(16)はその巻首である。(17)～(23)は一行目～七行目部分、(24)～(33)は二九行～三八行目部分である。(34)は『妙法蓮華経』観世音菩薩普門品第二五の九七行目である、五文字ごとに間隔を区切って記す。(35)(36)は経文は特定できていない。

9　関係文献

滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『国領遺跡』(二〇〇六年)

(神保忠宏)

異体字雑感

異体字の中には、複数の文字を組み合わせて一つの文字としているものがある。「麿」など、上下に組み合わせたものが典型であろう。や、通常二文字と見なされている「戸主」「戸口」もこうしたタイプに分類できる。

一方、左右に組み合わせたものも存在する。「娵」は、「采女」を左右に組み合わせる。また「鮮」と年魚を左右に組あわせた文字も先頃確認された。

左右に組み合わせる場合、最初の文字を右側に書く。これが、読む者を一瞬戸惑わせる。「娵」はつい「女偏」＋「采」に、「鮮」は「魚偏」＋「年」に見えてしまう。現在、「魚偏」に「堅」と書く「鰹」もまた、実は「堅魚」を右から書いた文字が定着したのであろう。

そんな事に感心していたら、渡辺晃宏氏が「こんな文字がある」と珍字の写真を見せてくれた。「鰭」。まあ要するに、魚の「腊」という事なのだろうが、古代人なんとも自由に、そして巧に漢字を使いこなしていたものである。

(馬場　基)